

あんげろす

中世ヨーロッパの自治都市は、欧米の知識人にとって、今日もなお郷愁を誘う歴史の情景である。『文明論之概略』では福沢も自由都市（フリ・シチ）に触れ、これを評価している。当時のギルドは、商人や職人の同業組合であると同時に、宗教的な同志団体でもあって、市民の間に自治と相互扶助の生活を生み出す力となった。たとえば生産は伝統的な製品に限られ、新発明によって一部の人間が多大な収入を得たり逆に没落したり、といったことを防止する協定が存在したのである。また女性も親方になれた。だからこれは単なる都市だったのではなく、都市共同体と呼ぶべきものであった。しかしまたこのような都市を舞台にして、「商業ルネッサンス」と呼ばれる初期資本主義の芽生えがあったと、経済史家は言う。するとどうなのか。資本主義の精神と相互扶助の精神、水と油のような二つのものが何とか調和を保っていた、そこに自治都市の文化を認めたいのだが、どうであろうか。

柴田 有（キリスト教文化論）

第21号

1999.3

